書評

中善則（編著）

『子どものための主権者教育 －大学生と行政でつくる アクティブ・ラーニング型選挙出前授業』

大阪国際大学短期大学部専任講師
古田 雄一

本書は、京都市右京区選挙管理委員会と、近隣大学の学生から構成される「右京区学生選挙サポーター」が協働で作り上げてきた主権者教育の取り組みをまとめた一冊である。実践は、主に右京区内の小学校で行われ、内容は大学生による選挙劇、模擬投票、グループワークなどを組み合わせたものとなっている。

小学校では、高校等と比べると主権者教育の蓄積も広がりもいまだ十分ではない。そうした中、本実践は、楽しい学習活動を通じて子どもに投票や選挙に興味を持たせることはもちろん、もう一歩踏み込んで、複数の争点を踏まえて選択できる思慮深い主権者としての力を育む工夫や、学習を一過性のものにせず授業後に家庭での会話を促す工夫など、主権者教育の可能性を意欲的に模索した実践となっている。また、授業を作る大学生側も多くのことを学べるのもこうした実践の魅力である。

加えて、評者が感じた本書の特色は、一つの実践を大変詳しく、また様々な角度から紹介している点だ。本書では、豊富な資料も用いて授業実践の詳細が描かれ、授業の開発・実施・改善の過程、児童・保護者・小学校教員の声、実践に携わってきた学生や行政担当者の振り返りなども掲載されており、実践を作り上げていくプロセスや、その背後にある議論や思考を読者も追体験できる。そうした点で、本書は、模擬投票を中心とした主権者教育のあり方について議論する上で、恰好の題材となる一冊だと思われる。

お知らせ

～ 第 5 回シティズンシップ教育ミーティング開催 ～

▶ **日 時**　2018 年 3 月 24 日（土）13:00 ～ 3 月 25 日（日）17:00

▶ **場 所**　立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館・12 号館（東京都豊島区）

日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）では、年次大会の位置づけでもある「シティズンシップ教育ミーティング」を以下の通り、開催いたします。

「18 歳選挙権」の実現や新科目「公共」の設置、道徳教育の教科化、地方創生の実現に向けた学校地域協働の推進や地域問題解決学習の広がりなど、シティズンシップ教育に関わる社会動向は大きな変化が見られます。こうした状況下だからこそ、様々な視点の人々と対話を通じ、「見晴らし」をよくした上で、自らの現場でどのような目的・目標を掲げて、どのような教育実践や参画推進、政策立案を行えばいいのかを考えたいものです。

今回の全体会では、私たちを取り巻く情報環境に着目します。市民が政治に参加したり、社会活動を展開したりしていく際、その判断や意思決定には情報の入手と吟味、そして、それを踏まえた発信を行なっていくこととなりますが、「ポスト真実」の問題が指摘される現在、情報との付き合い方を誤れば、自分に都合のいい情報に囲まれて、視野の奥行きも広がりも欠いて視点が偏ってしまう可能性があります。不完全な情報に踊らされてしまうこともあるでしょう。こうした陥穽に嵌らず、想像力豊かな市民が育つにはどうすればいいのでしょうか。この問いをみなさんと一緒に解いていきたいと考えています。

分科会では、小・中・高・大でそれぞれどのような広がりが可能なのか、また、今行われている実践を学校外の機関との協働で深めていくとどこまで到達できるのかといった「学びのデザイン」の話から、そういった学びのデザイナーとしての教師教育のあり方に至るところまで扱います。

前回から始めた「発表証明書」を発行する形での「高校生・大学生発表セッション」は今回も継続して設けられます。普段の学習や活動を発表する機会としてご活用ください！

既に日本各地では様々なシティズンシップ教育の実践や研究、政策形成が展開されてきています。異なる観点や力点で動いている関係者が集まり、議論を交わしながら、その多様性を日本のシティズンシップ教育の発展への活力としていければと願っています。

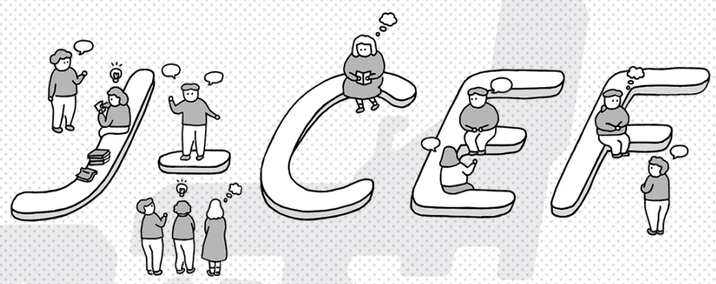
シティズンシップ教育につながる、多くの方々のご参加をお待ちしています。

▶詳しくは、以下 URL をご覧ください。
http://jcef.jp/news/report/networkmeeting/20180115_1147/
▶お申し込みは、こちらへ。
https://ssl.kokucheese.com/event/entry/503244/

J-CEF NEWS　No.14　2017 AUTUMN　発行／2018 年 3 月　編集／日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）　〒661-0965 兵庫県尼崎市次屋 1-2-20 ハイツアメニティ 2-203　Tel／070-6506-0369　E-mail／info@jcef.jp　定価／会員無料

J-CEF NEWS

No.14
2017 AUTUMN



02　リレーエッセイ
『ポスト・模擬選挙』へ～主権者教育＝模擬選挙でいいの？～
/ 古野香織（中央大学法学部政治学科 4 年）

03　実践事例紹介
子ども達とともに立ち上げた「サギとの共生研究所～「落とし所のない問題」に向き合った半年間～
/ 三浦一郎（姫路市立手柄小学校 教諭）

07　特集
シティズンシップ教育を進める上で何を大切にするべきか？
/ 河原光亮（広島大学大学院教育学研究科 博士課程後期）

09　連載
スウェーデンの学習サークルにみるシティズンシップ教育
/ 両角達平（YEC（若者エンパワーメント委員会）創設・元代表・サポーター / NPO 法人 Rights 理事）

10　推薦図書
教員に薦める 5 冊
/ 黒崎洋介（神奈川県立瀬谷西高等学校 教諭）
/ 杉浦真理（立命館宇治中学・高等学校 教諭）

12　書評
『子どものための主権者教育―大学生と行政でつくるアクティブ・ラーニング型選挙出前授業』
（中善則 編著）
/ 古田雄一（大阪国際大学短期大学部 専任講師）

12　お知らせ
第 5 回シティズンシップ教育ミーティング　開催のお知らせ

リレーエッセイ

『ポスト・模擬選挙』へ
－主権者教育＝模擬選挙でいいの？－

中央大学法学部政治学科４年
古野 香織

先日行われたJ-CEFスタディ・スタヂオTOKYOスタヂオvol.6において、「主権者教育＝模擬選挙でいいの？～都議選での主権者教育授業体験から考える～」という話題提供をさせていただいた。このテーマは模擬選挙推進ネットワークの林先生から「挑戦的なテーマ」と苦笑されつつも、どうしてもこれをやりたい理由があった。

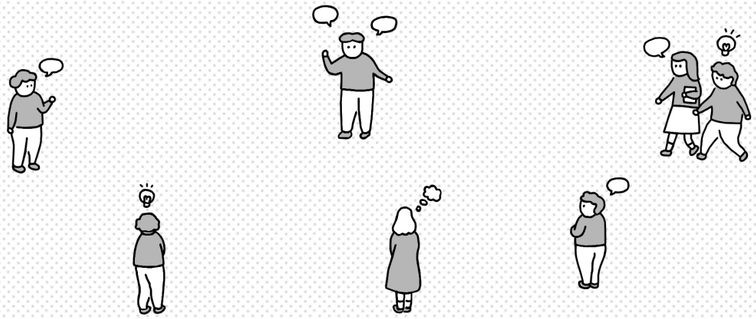
そもそもわたし自身、「模擬選挙」という形式で何度も高等学校の現場に入り、主権者教育の出前授業を行っていた立場である。これは中央大学の学生で組織したサークル活動の一環であったため、多い時には70名ほどの大学生ファシリテーターと共に、大学の付属高校の体育館を２つ貸切って模擬選挙を実施していた。これほど大規模に主権者教育を実施できること自体には非常に意義を感じていたが、ふと参院選の直前に「この授業はどれほど生徒にとって意味のあるものなのか」と疑問を持ってしまったのだ。当時、この模擬選挙は参議院選挙の公示後、かつ高校３年生を対象に実施するスケジュールとなっており、担当の先生方から「できるだけ政治的でない内容」にするようにと強く要望があった。当然私たちも相手の学校に迷惑をかけないよう十分配慮して内容を組み直し、結果「若者が政治に関心を持つにはどのような政策が良いか」といった議題にして、候補者を立て模擬投票を実施した。授業後アンケートでは、生徒の９割近くが「政治に関心を持った」「選挙に行こうと思った」等の感想を書いてくれたが、私の中の違和感は消えないままだった。

先日、突如発表された「解散総選挙」。最初は大義なき解散との声もあったが、次第に新党の設立や離党が相次ぎ、かなり情勢が読みにくい状態となっている。このため、公示後には有権者のための「わかりやすいメディア」が次々に登場した。各政党の主張、現在議論になっている政策のメリット・デメリット、自らの選挙区と立候補者、不在者投票のやり方、小選挙区と比例代表制の違い・・・

私が思うに、そもそも「有権者が選挙の直前になって考えなければならない事が多すぎる」のだ。多すぎるから、面倒になる。普段からちゃんと関心をもっている人であればさほど困らないかもしれないが、特に若者世代で言えば、圧倒的にそうでない人の方が多い。「夏休みの宿題を８月31日まで溜めてしまったときの絶望感」を、マジメであればあるほど感じてしまうのだ。

この絶望感を感じさせないためにも、日頃より主権者としてのリテラシーを磨いていく必要があるし、選挙権を獲得する前段階、つまり初等・中等教育全体で長期的にサポートすべき課題であると感じている。「模擬選挙」をはじめ、選挙の直前に一過性で終わってしまう主権者教育を乗り越えていくために、教育現場には何が必要なのか。大学卒業後には「社会科教育」という新たなステージで、このテーマについての研究を進めたいと考えている。引き続きJCEFの皆様にも、各方面からご教授頂ければ幸いである。

古野香織
(kekeke0924@gmail.com)



実践事例紹介

子ども達とともに立ち上げた「サギとの共生研究所」
－「落とし所のない問題」に向き合った半年間－

姫路市立手柄小学校 教諭
三浦 一郎

●はじめに

-「総合的な学習の時間ってまだ学校で行われているのですか？」

総合的な学習の時間（以下総合学習）の取組について、自治体関係者向けに企画提案するプレゼンテーション審査の場面で行った際、審査委員の一人から言われた言葉である。学校教育外の一般的な方の総合学習に対する認識が、とてもよく表れていた。

2000年から鳴り物入りで、段階的に教育課程に組み込まれた総合的な学習の時間。当時は各種研究指定校や附属小学校などを中心に積極的に研究が進められた。唐木〔2015:21-22〕は「現在のところ、シチズンシップ教育を最も導入しやすいのは、総合的な学習の時間である」とし、その理由を自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育成するという総合学習の目標がシチズンシップ教育の目指すところと軌を一にするという点、教育課程において教育内容が明示されている教科に比べて比較的柔軟に学習を計画できるという点としている。

しかし、現在一部の学校において「補充学習のような専ら教科の知識・技能 の習得を図る教育が行われたり、学校行事と混同された実践が行われたりしている。」といった事例が見られる（中央教育審議会〔2016:46〕）など、総合学習への理解が浸透しているとは言い難い。また官製・民間問わず教員対象の研修会においても、総合学習を真正面から取り扱う研修は多くはない。総合学習は停滞気味というのが現場に身を置いての感想である。

- 実施背景

手柄小学校は、姫路駅に南に数キロ南下したところに所在する中規模校である。その職員室から見える手柄山の東側の斜面には僅かではあるが手付かずの原生林がある。現在、本校に赴任してきたときに見た職員室からの光景は忘れられない。手柄山の緑の背景が一面真っ白い点々に覆われている。聞くと「サギの群」だという。近年手柄山の東面にはサギの大規模なコロニー（集団繁殖地）が形成されてきており、ダイサギ、コサギ、アオサギをはじめとする６種類のサギ、合計数百羽が生息している。サギは姫路市の市鳥であり、姫路市民にとって身近に感じられ、愛されている野鳥である。しかし、職員室で聞いたサギのイメージは非常に悪かった。この手柄山と、サギのえさ場となっている船場川・姫路市中央卸売市場との間に本校は位置しているため、落ちてくるサギの糞やエサ、それらから出る悪臭、鳴き声などに悩まされている。そうした中で児童・教職員はサギに対して嫌悪感を抱く傾向がある。

これまで本校の５年生では環境をテーマに、近くにある河川の水質調査などの学習活動をしていたのだか、この現状を見聞きして、解決に向けての具体的な方法が思い描けたわけではないが、目の前にあるこの問題自体をなんとか総合学習で扱うことはできないだろうかと考えるようになった。このサギとの共生問題は、本校の児童が取り組むべきことだと思い至った。

小さくてもいいので、本物の社会問題に向き合ってほしい。解決できると分かっているから取り組むのではない。解決できると見通しが立つから学習材として相応しいのではない。世の中にはすぐに解決できないような問題がゴロゴロしているからだ。それに対してどう向き合うか、その向き合い方を、児童たち、先生たちみんなで考えたいと強く思ったのだ。

なぜ手柄小にこんなに被害が多いのか

姫路市立手柄中学校 文
姫路市立手柄小学校 文
サギのコロニー
手柄山の原生林
姫路市中央卸売市場
ひらの博正山
文 手柄小学校
文 手柄幼稚園
姫路市立保育園 手柄分園
ムーズマリオネット こども園
ミライエ
JR姫路駅
交番
姫路西店
姫路西郵便局
姫路西高校
姫路西病院
姫路西中学校
姫路西小学校
姫路西幼稚園
姫路西ルーテル学園 幼稚園・小学校・中学校
姫路西ルーテル学園 高等学校
姫路西ルーテル学園 聖隷姫路病院
姫路西ルーテル学園 聖隷姫路看護専門学校
姫路西ルーテル学園 聖隷姫路リハビリテーション学院
Homes 姫路市手柄指定
姫路市立手柄中学校
姫路市立手柄小学校
姫路市立手柄幼稚園
姫路市立手柄保育園
手柄山
姫路城
姫路駅
姫路城西郵便局
姫路城西高校
姫路城西病院
姫路城西中学校
姫路城西小学校
姫路城西幼稚園
姫路城西ルーテル学園 幼稚園・小学校・中学校
姫路城西ルーテル学園 高等学校
姫路城西ルーテル学園 聖隷姫路病院
姫路城西ルーテル学園 聖隷姫路看護専門学校
姫路城西ルーテル学園 聖隷姫路リハビリテーション学院
Homes 姫路市城西指定
姫路市立城西中学校
姫路市立城西小学校
姫路市立城西幼稚園
姫路市立城西保育園
姫路市立城西幼稚園 城西分園
姫路市立城西保育園 城西分

そして、子ども達と共に考えた単元の名称が「サギとの共生研究所」である。兵庫県豊岡市の「コウノトリの郷公園」がコウノトリについての様々な研究を行なっているように、この問題に対してもすでにそのような研究機関があれば、そこに教えを乞い、解決の糸口を見つけていただろう。しかし、この問題について近隣で取り組んでいる研究機関や団体はなかった。（ちなみに遠く離れた北海道には「北海道アオサギ研究会」という民間の研究会があり、アオサギとの共生について様々な研究や情報発信を行っている。本単元を進める上でメール・電話で連絡を取り合い、様々な示唆をいただいた。）そのような研究機関がないなら、自分たちで立ち上げようという発想であった。一人一人が研究員として、自覚を持つために手作りの名刺を作り、サギとの研究所研究員としての活動がスタートした。

▲ サギとの共生研究所のネットワーク図
多くの方の協力のもと探究を進めることが一目で分かる

▲ シラサギと名前のついたお店の種類を分類分けする

（2）インタビューで困っている人の生の声を集める

活動にあたり、まずサギのイメージが姫路市民と手柄小の子ども達・教職員の間で全く異なることを知り、なぜここまで違いが生じるのかという課題意識を持てるようにした。一番の被害を被っている他学年の子ども達・職員にインタビューを行い、思いや考えを聞く機会を設けた。そこで指導したことは、「めっちゃ、あたまにきていること」、「うんざりしていること」、「あきらめてしまっていること」そういった不機嫌、不快、不満などの「不」の気持ちを聞き取ってくるということである。「不」を知ることで、人の感情が乗った情報を集めることができる。一般的な事実だけではなく、人の生の声をどれだけ集めることができるかは、「なんのためにこの学習を行うのか」というプロジェクトの根幹にも関わる部分なので、インタビュー前に強調した。子どもたちはサギの糞害や悪臭に困る生の声に触れ、その問題の具体的な姿を情報として知ることができた。

（3）まずは教師がフィールドワーク・取材に出て人に出会う

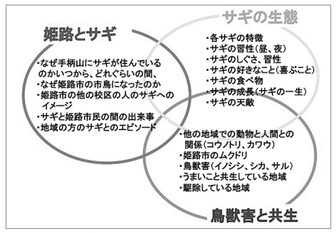
学校関係者がサギを嫌悪している一方で、地域にはサギの写真を撮り続けている人がいた。生涯学習の講座で写真を学んでいる鈴木さんである。単元開発のフィールドワークを行なっている時に思い切って声をかけてみたところ、この単元のコアとなる情報をたくさんお持ちであった。再度会いに行き、子ども達と一緒に声をかけて、学校にゲストティーチャーとして来ていただけるようにお願いした。子どもたちは手柄山のサギを約５年間にわたり撮り続けている鈴木さんの話を聞くことで、その負の側面だけではなくて、美しさや生態面での面白さという視点からもサギのことを考えられるようになっていった。

このようなフィールドワークや取材は、単元が始まってからも子どもの学習と並行して続いた。単元の構想やイメージはあっても、それだけで学習が進んでいくわけではない。その学びの素材はフィールドワークで出会う「ヒト」「モノ」「コト」に求めたい。先に教師が想定しておいた探究のルートを“なぞらせる”のではなくて、子どもから生まれてきた問いや考えを元に教師も“共に探究する”。子どもの問いを考える上での手がかりを持っていそうな人を訪ねたり、何度も繰り返し現場（今回は手柄山）に足を運んだりする。すると例えば次の会話のやりとりのように、様々な学習リソースが見えてくる「鈴木さんの話をからすると、○○さんが予想していたように、サギは市場のエサを狙うためにこの場所を選んだのかもしれない。」「どうやら姫路科学館に、コレクションという日本でも有数の鳥類の剥製のコレクションがあるらしい。様々なサギの剥製を借りることができないか誰か電話で尋ねてみてくれへん？」「市場にエサをとりに行っているのなら、市場で働く人たちはサギのことどう思っているんだろう。」

子ども達の問いや考えと、フィールドワークで見つけた素材がダイナミックに関連してくる。そして、教師と子ども達の関係は教える－教えられる関係から、共に探究する関係へ組み変わっていった。

（4）３グループに分かれて探究する（探究１）

子どもたちが考えるサギについてさらに調べたいことをもとに、「サギの生態」「姫路とサギ」「鳥獣害と共生」の３つの調査プロジェクトに分かれ調査活動を行った。私たちの総合学習ではこの「選択」の機会をとても大切にしている。決められたカリキュラムを満遍なく学ぶ傾向の強い教科学習とは違い、総合学習では一人ひとりの興味関心に添うこともできるので、その価値を最大化したいと考えたからである。「選択」をするからこそ、「責任」が生まれる。学びの「責任」を問うことができる。



▲ ３つのプロジェクトに分かれる

（5）情報を集め、整理・分析する

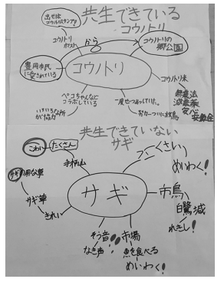
担当の調査プロジェクトが決まったら日々情報を集めていく。情報を集めるツールとしては、情報カードを使っている。サギについての家族の考え、まちのいたるところに点在するサギをモチーフにしたマーク、サギ以外の鳥類や動物が及ぼす鳥獣害の事例など日々宿題に出して記入してきた。厚手のケント紙に印刷した情報カードが蓄積されていくことは子ども達の収集心をくすぐって楽しいようでもあった。蓄積した情報を思考ツールを使い、整理・分析し、サギとの共生に向けた解決の糸口を探っていく。思考ツールに関しては教科の中でも取り扱い、使い方を段階的に習得させていくことで、本単元で活用できるように指導していった。

子ども達とともに立ち上げた「サギとの共生研究所」－「落とし所のない問題」に向き合った半年間－

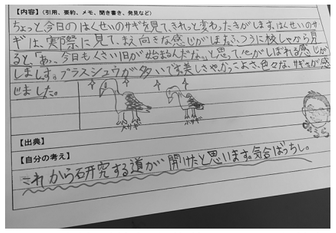
調査活動の一環として、姫路科学館の学芸員に出前講座を子ども達から依頼した。日本有数の鳥類のコレクションである「小林平一コレクション」の中から６種類のサギの剥製をお借りして、間近で見ることにより、実物の持つ迫力や美しさといったサギの魅力に気づいていった。また、コウノトリ郷公園の学芸員をお招きして、コウノトリとの人間との共生の歴史について話を聞くことで、他地域での鳥類との共生について学んだ。

また、サギの生態について調べてきたある子は、昔は数多く合ったサギの住処である鷺山が都市化や乱開発に伴って、激減している事実に気づいた。そして、手柄山に毎年やってくるのは、手柄山にありのままの自然が残っているからではないのか、そしてここでは人が追い払わないからではないかと考えて、考えを作文に書き記した。

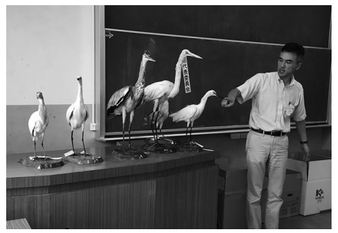
▲ コウノトリの郷公園のスタッフによる出前授業の様子。コウノトリとの共生について学ぶ



▲コウノトリとサギの事例を比較する



▲子ども達が情報を蓄積していった情報カード



▲ 姫路科学館の学芸員による出前講座
６種類のサギの剥製を間近で見ることができた

（6）「手柄山のサギ」の魅力とは何か、それを誰に伝えるのか

調査活動を通して気付いた「手柄山のサギ」の魅力についてはKJ法で整理し、焦点化させていった。子ども達が見出した「手柄山のサギ」の魅力とは、命を必死に繋いでいくその様であった。この手柄山は繁殖地である。この土地でサギの親鳥たちは必死に雛を育て一人前に育てあげる。皆を困らせていた異臭は親鳥がエサを一度飲み込み巣に戻り、雛に口渡しでエサをあげる際にどうしても落ちて匂ってしまうものである。騒音にもなっている鳴き声も、子の鳥が親鳥を求める鳴き声であったり、天敵であるカラスを追い払おうと必死にあげる鳴き声であったりすることが分かってきた。

そして、その魅力を誰に伝えたいかという観点から「幼稚園のみんなへ」「手柄小の仲間へ」「先生方、お世話になった方へ」という対象毎に３つのプロジェクトに分かれた。自分がプロジェクトを選択した理由をもとにプロジェクトの目的を考えた上で、「手柄山のサギ」の魅力を伝える方法についてブレーンストーミングでアイデアを出し合った。幼稚園児に対しては演劇を通して伝える、他学年に児童に対してはサギのキャラクターをデザインしたステッカーやマグネットを制作・配布する、先生方やお世話になった方に対しては渡り廊下にフォトギャラリーを開くなどである。出たアイデアから具体的な方法にまとめ、企画の目的を意識して準備をしたり、練習したりする時間を持った。その後、実際にそれぞれのプロジェクトの対象となる相手に対して企画を行った後、自分たちの企画について、成果と課題を明確にする振り返りを経て、各クラス内でそれぞれのプロジェクト毎に報告した。最後に単元全体を振り返り、自分のサギに対する認識の変化やプロジェクトへの関わりついても振り返ることにより、自身の成長と今後の課題を明確にして単元として学習を終えた。

▲ 調査してきたことを伝え合う

- 対象者の変化 / 声

（1）サギや手柄山に対する認識の変化

学習を通して、単なる景色でなかった「手柄山」に愛着を持つ子ども達が増えてきた。それまでは「シラサギ」と一括りに呼んでいたが、写真家の鈴木さんのおかげで「ダイサギ」「チュウサギ」「コサギ」「アオサギ」「アマサギ」「カサゴイ」という６種類のサギがいることが分かった。（子ども達自身も含め多くの姫路市民が使う「シラサギ」という呼称はそのうち「ダイサギ」「チュウサギ」「コサギ」３種の白いサギの総称である。）種類ごとに名前が分かると区別できるようになる。区別できるようになるとその多様性に気がつく。サギによる異臭や騒音も、命を繋ぐための営みのために仕方のないことだと分かると嫌悪感は薄れていく。「ギッシリ鳥が集まる気持ち悪い手柄山」から、「多くの種類のサギが集まる貴重な自然・手柄山」へと認識が変わっていったようであった。

（2）まちに対する認識の変化

「サギとの共生研究所」の研究員であった子ども達は、小学校６年生になった現在「手柄まちの未来プロジェクト」という校区の未来を考えるプロジェクトに取り組んでいる。その学習の過程で、今のまちの「まちのいいところ」「まちの問題」「大人と話し合いたいこと」について整理した。予想に反して、「まちの問題」としてサギの存在を挙げた児童はほとんどいなかった。逆に、サギのコロニーをどう守るか、サギとの共生をどうすすめるか、もっと積極的な意見では、サギと共生しているまちの魅力をどう発信していくかという意見が見られた。サギの実際的な被害は減ったわけではない。子ども達のサギや手柄山に対する

認識の変化は、環境をテーマに取り組んだ学習として完結していたわけではなく、その後まちづくりをテーマにした学習の範疇にまで広がってきている。

（3）１年後に聞く「あなたにとって『サギとの共生研究所』とはどのような学習でしたか」

本稿執筆を機会に、１年経った子ども達に当時を振り返って、自分にとって「サギとの共生研究所」とはどのような経験だったのかを聞いてみた。

○１年前に「サギとの共生研究所」を立ち上げたとき、私は「サギなんて糞とかで臭いからいなくなればいいのに」と思っていました。特に私は（サギのコロニーから）家が近かったからです。でも、歴史などを調べているうちに、かわいそうなのは人間ではなくサギだということを知って、サギと共生したいと思えるようになりました。

○自分にとって「サギとの共生研究所」は簡単にいうとサギと仲良くなるためのプロジェクトだったと思います。サギを大切にしようとすると、自然も大切にするようになると思います。とてもいいプロジェクトでした。

○僕にとって「サギとの共生研究所」は自分以外の生命を知ることのできるプロジェクトだったんだと思います。でも、知るだけでは共生はできません。僕は人間がサギのことを好きにならないと共生は無理だと思います。今でもサギを嫌いな人はいっぱいいるし、僕も正直今でもサギが嫌いです。でも良い経験にはなったと思います。

○「サギとの共生研究所」はサギ“を”なんとかするプロジェクトではなくて、サギ“と”なんとかするプロジェクトだったと思います。

○私にとって「サギとの共生研究所」は、今までしてきた中で一番大きくて、難しいプロジェクトでした。今日再び考えてみても前とは変わらず、子どもだけで考えるのはけっこう難しかったと思います。

- 課題と展望について

最後に、総合学習全般の課題について触れたい。この単元を進めるにあたっても感じたことだが、学校現場は、社会の中ある生々しい問題に向き合うことへの抵抗感があるのではないかということである。

児童の興味関心を重視しながら、身の回りの日常生活や社会事象から教材化していくことが求められる総合学習に比べて、教科や道徳では、一般化され、整理された内容や課題を扱うことが多い。社会科では各校区における地域教材の開発に力が注がれることもあるが、教えたい内容やその学習材によって子ども達が学ぶことのできる価値を予め明確にしておくことが求められる。

過疎化や高齢化の問題、国際化の問題、環境問題など、大人であってもどこから手をつけていっていいのかさえも悩んでしまう社会問題は多い。総合学習はまさにそのような現代的な諸課題を学習の対象として扱うことが望まれている。しかし、問題解決の方向性がはっきりしない学習に取り組んでいる時、「この学習の落とし所はどこですか」と尋ねられることは少なくない。「這い回る経験主義」に陥らないようにと言って下さっているのだと理解している。「落とし所」が見えないと教材化しにくい・指導しにくいという問題も確かにあるだろう。しかし、私は別の問いを持ちたい。本当に「落とし所」がないと教材として相応しくないのだろうか。私たち教師は「落とし所のある」教材ばかりを扱う中で、その弊害として、落とし所の見出しにくい問題を学校から排除しているのではないだろうか。「落とし所のなさ」に粘り強く向き合うことで、見えてくるものが必ずある。決して解決してスッキリという類のものでなくとも、「這い回りながら」も諦めずに向き合った手探りのプロセスこそが、これからの人生のなかで時折蘇ってくるのではないだろうか。たとえ、はっきりとした「落とし所」見つからない問題であっても、諦めずに問い続ける、考え続ける子ども達を育てていきたい。

◆参考文献
唐木清志・岡田泰孝・杉浦真里・川中大輔 . 監修、J-CEF 編 .(2015).『シティズンシップ教育で創る学校の未来』. 東洋館出版社 .
平成 28 年 3 月 24 日
中央教育審議会教育課程部会 生活・総合的な学習の時間 ワーキンググループ .(2016) 資料 7『総合的な学習の時間について』

事例の意義を解説する「編集者の目」

水山光春 (京都教育大学教育学部教授)

姫路市立手柄小学校における「サギとの共生研究所」の取り組み，この実践は二つのことを私たちに考えさせてくれる。

その一，迷惑動物としてのサギと姫路市のシンボルとしてのサギという見方の違い。この違いだけなら日本のどこにでもよくある話で，鬼頭秀一が名著『自然保護を問い直す』(ちくま新書，1996) の中で述べた，対象と「」の関係にある近隣住民と，関係の切れた「切り身」の関係にある「よそ者」との捉え方の違いに近い。一般に，対象と切り身の関係にあるよそ者は，対象を美化しがちであるのだが，本実践では生身とも切り身とも文章だけからは判断しがたい「鈴木さん」という人が現れて，子どもたちのサギに対するネガティブイメージを取り払ってくれる。そのくだりが秀逸だ。

その二，三浦教諭は，この実践を総合学習におけるシティズンシップ教育と捉え，目の前にある解決の見通しのつかない（落としどころの見えない）ホンモノの社会問題と，子どもたちが向き合うことの意義を説く。ちなみに日本でも有名なシティズンシップ教育研究者で筆者の友人でもある Ian Davies 氏は，シティズンシップ教育実践がホンモノであるための条件として，1) 扱う課題が現代的なものであること，2) 参加及び，3) 参加に対する振り返りの要素が活動に含まれていること，4) 適切なシティズンシップ「概念」を含んでいることの四つを挙げている。本実践が 1) ～ 3) をクリアーしていることは明らかだが，では，4) の適切なシティズンシップ概念となると，三浦先生は何を挙げられるだろうか，今度お会いしたときに是非聞いてみたい。

特集

シティズンシップ教育を進める上で何を大切にするべきか？

広島大学大学院教育学研究科 博士課程後期
河原 洸亮

● 評価からみたシティズンシップ教育

- はじめに

世界的にシティズンシップ教育への関心が高まりをみせている中，日本の学校教育や社会教育においても多様なシティズンシップ教育が実践・提案されている。シティズンシップ教育を端的に語ることは難しい。国民育成を強調するもの，国境を越えた世界市民の育成を強調するもの，地域コミュニティをつくるよりよい市民育成を強調するものなど，提唱される理念やそれに基づく実践は多岐にわたる。

多様なシティズンシップ教育について共通点をあげるとするならば，至極当然のことだが，これらは教育活動の一環として意図的・計画的に行われる点である。意図や計画をもって実践が行われる以上，その実践の効果を評価する必要がある。なぜならば，そのシティズンシップ教育の有効性や妥当性を示したり，課題を浮き彫りにして改善をしたりするためには，その実践によって生じた具体的な学習の事実に基づいて行われなければならないからだ。評価という営みは，抽象的な教育理念に基づく実践の結果を学習成果として表出させる。つまり，提唱されるシティズンシップ教育を評価という視点から分析することによって，そのシティズンシップ教育の実像・実態が浮き彫りになるだろう。

そこで本稿では，イングランドの中等教育資格試験(General Certificate of Secondary Education，以下では「GCSE 試験」とする）の「シティズンシップ」を事例として取り上げ，GCSE 試験「シティズンシップ」が①何を市民性としているか，②それをどのような方法で見取っているか，この２点を評価という視点から明らかにしたい。

- 事例としてのGCSE試験「シティズンシップ」

（1）イングランドにおけるシティズンシップ教育の位置づけ

イングランドにおけるシティズンシップ教育は“アクティブ・シティズン”の育成を目指して，2002 年から中等教育段階で必修化された。学校カリキュラムの中にシティズンシップ教育をどのように位置づけるかは，各学校の裁量に委ねられ，独立科目として設定する学校もあれば，地理科や歴史科の中に教科横断的に設定する学校もある。さらに，GCSE 試験の受験科目として「シティズンシップ」を採用するか否かも各学校によって判断される。本稿で取り上げるのは，「シティズンシップ」を独立科目として位置づけ，尚且つそれを GCSE 試験の試験科目としているケースである。

（2）GCSE 試験の概要

GCSE 試験は後期中等教育段階にあたるキー・ステージ４（14～16 歳に相当）の最終学年の生徒が受験する資格試験である。英語・科学・数学をはじめ，歴史・地理・シティズンシップ・音楽などが受験科目として設定され，必要に応じて受験者が科目を選択する。科目ごとに最終的に A*～G までの８段階でグレード（評定）が確定し，これらは進路選択の際に大きく関わる。英国には複数の試験団体（Examination board）があり，各試験団体はナショナル・カリキュラムの制約の範囲内で独自の試験を作成している。本稿では，試験団体の１つである Edexcel 社の試験問題を取り上げる。

Edexcel 社の GCSE 試験「シティズンシップ」は２つのユニットで構成される。ユニット１はペーパーテストによる外部評価が行われる。外部評価は試験団体が提示する日程で，全国一斉に各学校で実施され，採点は試験団体の採点官が行う。ユニット２はコースワーク（各学校のカリキュラムの中で行うプロジェクト）を内部評価として行う。実践したプロジェクトに関して，設問に沿ってエッセイを作成し，各学校の教師がそれを採点する。ユニット１（ペーパーテスト；外部評価）が 40 点，ユニット２（コースワーク；内部評価）が 60 点の配点構造である。以下では，ユニットごとに試験問題や評価ルーブリックを手がかりに，GCSE 試験「シティズンシップ」が受験者に求める市民性に迫りたい。

- ユニット１

- 資料読解・政治言説の分析 -

ユニット１はセクション A・B の２パートで構成される。紙幅の都合上，問題文に触れることはできないが，セクション A は客観テストであるのに対して，セクション B では論述式のテストでルーブリックを用いた採点が行われる。セクション A では，事象そのものを問う「知識再生型」の問題や，資料読解に関する「資料解釈型」の問題，社会現象を分析させる「社会現象分析型」の問題で構成される。セクション B では，実社会において対立する政治的言説が示され，それについて議論を構成し，自身の立場も主張させることで受験者に議論に参加させている。2014 年試験では「テロ容疑者の人権はいかなる場合も尊重されるべきである」という政治的言説が取り上げられた。セクション B での評価ルーブリックは，提示された政治的言説に関する適切な根拠を示しつつ，対立する双方の主張を踏まえた議論を構成しており，それに対する自身の見解や主張が述べられているかどうかが評価の対象になっている。

バーナード・クリック（2011）はシティズンシップ教育における政治的リテラシーの育成を強調し，若者がもつべき基本的な政治的リテラシーを「日常生活や日常言語から取り出された概念を現実に即して理解すること」とし，それが身に付いたといえるのは「主だった政治論争が何をめぐってなされ，それについて主立った論者たちがどう考え，論争が我々にどう影響するかを習得したとき」であると述べる。すなわち，ユニット１では政治的リテラシーを評価対象の中核に据え，社会の仕組みや制度，概念を現実社会で発見するとともに，論争の対立

構造を分析することを要求している。これらは受験者である生徒が，社会参加するときに，ただ活動に参加するのではなく，その活動の根拠となる知識や概念を携え，批判的に社会参加するために必要なものとして評価されている。

- ユニット２
- 認知的・実践的な社会とのかかわり -

ユニット２では，コースワークとして，普段の授業の中で約２か月かけてプロジェクトを実践する。受験者はそのまとめとしてエッセイを作成し，各学校の担当教師がその採点を行う。コースワークでは，４つの設問（「シティズンシップの問題の探究」「弁論と表現スキルの適用」「シティズンシップの問題への参加」「行った活動の影響についての評価」）に対する解答として設定された時間内にエッセイを作成しなければならない。このコースワークの中で，受験者は自身にとって身近な学校や地域の中からシティズンシップの問題を発見し，グループやその問題に関して社会的影響力をもつ人との対話を通して，それを実際に解決するための活動を行い，その成果や自己の変容を自己評価するまでの社会参加プロセスの振り返りを行っている。

取り組みの例を１つ紹介しよう。筆者が現地調査で訪問したＡ中等学校のある生徒は「テムズ川クリーン・キャンペーン」と題するプロジェクトを実践していた。生徒たちはテムズ川の汚染問題を国レベルでも地域レベルでも生態系や人々の生活を脅かす深刻なシティズンシップに関する問題とし，６人程度のグループを組織してテムズ川の問題解決に向けて，政治家や市民団体と対話をし，学校の生徒に対しては自作の広報リーフレットを配布するなどの活動を行った。そして，一連の活動の成果や活動における自身の貢献，そして，自身にとっての理想的な政治のあり方の変容を省察している。

ユニット２では，自己と社会とのかかわりを２つの視点から評価している。１つは認知的なかかわりである。「社会に参加する“私”」「社会を分析する“私”」「私や社会の変化をメタ的に分析する“私”」のように，多元的な“私”と社会との認知的なかかわりを市民性として評価している。２つは実践的なかかわりである。個人・学校・社会のように，拡大する複層的な“社会”とその構成員である“私”とのかかわりが評価の対象となっている。評価にあたっては，設問ごとに観点が複数組み込まれたルーブリックがあらかじめ示されている。例えば，設問２「弁論と表現のスキル」は，「立場の複数性」「実社会でのコミュニケーション」「対話する相手の影響力」「弁論スキルを示すエビデンス」が観点として組み込まれている。

- まとめにかえて

ここまで２つのユニットの分析を通して，GCSE試験「シティズンシップ」で評価される市民性とその評価方法をみてきた。

GCSE試験「シティズンシップ」では，受験者も政治主体としての一人の市民とされる。一市民である受験者は，シティズンシップに関する個別的な知識のみならず，知識と一体化した分析力や批評力，社会への参加行動とそれを省察するメタ認知能力が求められる。つまり，GCSE試験「シティズンシップ」は，知識に基づいて社会を客観的に分析するリテラシーとこれらを現実社会で能動的に行使する実践力も評価の対象としている。これら双方を試験の中にうまく統合し，１つのシティズンシップ教育論を体現しているといえるだろう。

また，日本の教育実践では対比的に捉えられがちな「指導と評価」「授業とテスト」「学校と社会」「子どもの学びと社会での行動・変革」について，GCSE試験「シティズンシップ」はこれらを分かつことなく連動し一体化したシティズンシップ教育を実践している。シティズンシップ教育の考える上で，このようなホリスティックかつオーセンティックな実践と評価は不可避であろう。先で挙げた対比されがちな両者を，いかに接続・統合・連動させていくかが，シティズンシップ教育の重要な課題の１つである。

冒頭で述べた通り，シティズンシップ教育の理念や実践は実に多様である。掲げられたシティズンシップ教育の理念が実際に実現・達成できているのか，評価という視点から見直すことで新たな発見があるのではないだろうか。

河原 光亮
（kawkaw11k27k@gmail.com）

◆参考文献
バーナード・クリック著，関口正司ほか訳（2011）『シティズンシップ教育論：政治哲学と市民』，法政大学出版．

連載

スウェーデンの学習サークルにみるシティズンシップ教育

YEC（若者エンパワメント委員会）
創設・元代表・サポーター/
NPO法人Rights理事
両角 達平

これまでの連載では、ヨーロッパにおける分断社会の到来、スウェーデンの若者会、そして特集記事ではスウェーデンの生徒会活動について紹介した。今回は角度を変えてスウェーデンの民主主義の根幹をなす「学習サークル」の取り組みについて紹介したい。2017年６月、学習サークルの元締めの一つである学習促進協会（Studie främjanet：以下SF）を訪問しコーディネーターのアンネさんにお話しを伺った。

- 学習サークルとは何か？

◀ 左から筆者とSFのコーディネーターのアンネさんと津富宏教授（静岡県立大学）

学習サークルとはスウェーデン語でStudiecirklar（英：Study Circle）と表記されるので、「スタディーサークル」と呼んでもいい。学習サークルは、小規模のグループ（通常5〜8人）が協働で主体的にある特定の科目について学ぶことを活動の基本としている。科目は、語学、文学、芸術、工芸、演劇、社会学、音楽、自然科学など多岐に渡り、各々のグループが選ぶか、もしくはその科目を学ぶグループに個人が加入する。学習方法は、文献の輪読、講師の招待、ワークショップ、ゼミナール形式、ネットを使った遠隔学習など科目や参加者のニーズに応じて自己編成することができるのもまた学習サークルの特徴である。大抵の場合、月２回の学習会が４カ月継続することになる。

それぞれの学習サークルの活動を支援する「学習協会（Studieförbund）」が10種類ほどあり、それぞれ母体とする運動体や政治団体が異なるのでそれぞれに特色があり。例えば、ABF（労働者教育連盟）という学習協会は1912年に設立され労働・消費者運動を起源に持つ故に、左派の労働組合や社会民主党と連携している。反対に、Mbsk（市民教育連盟）という1940年に設立された学習協会は中道右派の穏健党と連携している。他にも、FSやKFUK、SKSは教会運動が母体となっているので宗教色が多少みられる。そんな中で、政治色も宗教色も持たないで、自然、動物、環境、文化を主な科目として扱っているのがSFなのである。

個々の学習サークルはこれらの学習教会に加盟することで、少額の助成を受けたり、学習協会が所有する施設を利用したり、教材を提供してもらうことができる。

◀ストックホルムの一等地に所在するABFの施設。カフェ、会議室、ホール、教室などはABFに所属する学習サークルなら無料で使用可能

学習サークルの参加者の募集や施設の予約なども、各々の学習協会のホームページ上で管理するができる。さらに、それぞれのサークルのリーダーに運営方法に関するセミナーを開講したりと中間支援的な役割も担うことで、学習サークルの活性化を促す。

2015年には、これら10種類の学習協会に登録している学習サークルの数は、27万2000団体に及び、合計の参加者数は170万人であった。今年、ようやく１千万人に達したスウェーデンの人口に比べると、いかに学習サークルが盛んであるのかを察することができる。

- 学習サークルの原理原則

学習協会に加盟した場合にはその学習協会のルールに従うことが求められるのは、国からの助成金の規定があるからだ。参加費はほとんどの場合が無料であるが一部、実学系の個人ベースでの学習をする講座については費用を負担してもらうこともある。何故ならば、それらは共同学習を原理原則に置く学習サークル的な活動ではないからだと、アンネは語る。

「学習サークルでの学には、個々人の学習がベースの大学などとは違って、より自発性を大事にます。学習サークルは、19世紀の終盤の新たな政治運動の中で生まれました。当時は市民の識字率が高くなかったので、字が読めて知識がある人から他の人が話しを聴くというスタイルが普通になったのです。それは知識を共有することが目的であるので、もちろん試験もなくて強制されることもありません。学び方自体が民主的なので、学校とは違って一人一人が自らの意思で参加をするので、すべての人がその場に貢献できるのです。」

その上で、学習サークルの活動はスウェーデンの「民衆教育（folkbuildning 英：citizen education）」の根幹を成していると教えてくれた。民衆教育とは、図書館、民衆大学（北欧特有の18歳以上の成人が通うことができる教育機関）、そして学習サークルなどの教育活動を通じて、社会を構成する市民の一人一人が、民主的で平等な方法で、新たな知識と価値を獲得することを目的としている。

スウェーデンにおけるシティズンシップ教育とは、この「民衆教育」を基盤としているのかもしれない。ただし、アンネによると学習サークルは、助成金獲得のための規定による年齢制限（13歳以上でなければいけない）や、アフターワークや休日ではないと活動ができないので、子ども・若者の参加率は限定的であるという。そのような点からするとスウェーデンのこの民衆教育は、成人の生涯学習の意味合いが強いように思われる。

両角達平
(tatsuhei.morozumi@gmail.com)

◆参考文献
スウェーデン全国教育審議会 .(2017).Studieförbund retrieved from http://www.folkbildningsradet.se/Studieforbund/
澤野由紀子 .（2008）.北欧における民衆成人教育の伝統 retrieved from http://ejiten.javea.or.jp/content.php?c=TkRReU5qRTQ=
野崎俊一 .（2013）. スウェーデンの学習サークルと受講生の意識調査（そのⅡ）.

推薦図書　教員に薦める５冊

神奈川県立瀬谷西高等学校教諭
黒崎 洋介

軋む社会　教育・仕事・若者の現在

本田由紀 著
出版社：河出書房新社／ 2011 年出版

望ましい教育の在り方は、社会の姿に規定されます。本書では、現代の社会における家族 - 教育 - 仕事という三つの社会領域間の循環関係に生じている「軋み」を浮かび上がらせています。子どもを取り巻く社会の実像を見つめる上で最適な一冊です。

「学び」から逃走する子どもたち

佐藤学 著
出版社：岩波書店／ 2000 年出版

それでは、どのような教育が現代の社会において必要でしょうか。本書では、子どもに「学び」に対するニヒリズムとシニシズムが生じていると指摘した上で、対象世界・他者・自己との対話的実践である「学び」の実現を提唱しています。現代の教育の課題や進むべき方向性を示してくれる導きの一冊です。

「アクティブ・ラーニング」を考える

教育課程研究会 編著
出版社：東洋館出版社／ 2016 年出版

実際の教育改革の動向においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現が謳われています。本書は、文部科学省職員や中教審委員など様々な執筆者がアクティブ・ラーニングについて個人的な見解を寄せた論考集です。その多様な見解を通して、曲解されがちなアクティブ・ラーニングの本質に迫れる一冊です。

学びをつむぐ　＜協働＞が育む教室の絆

金子奨 著
出版社：大月書店／ 2008 年出版

一方で、学校教員である私たちは、学校教育における事実が、まずは教室にしか存在しないことも痛感しています。本書は、現役高校教員である筆者による協働学習の実践記録です。深い哲学に基づき、教室を公共的な空間へと誘う著者の実践の姿勢に深く感銘を受ける一冊です。

生活の荷車を曳け　生活者としての教師の詩

深沢義旻 著
出版社：新評論／ 1971 年出版

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すこれからの教育においては、学校教員には、これまで以上に高度な知識と教養、見識が求められるといえます。本書は、小学校教員であった著者による生活綴方教育に基づく実践の断片を知ることのできる詩集です。子どもに伝えるべきことのため「磨滅することのない鉄筆がほしい。その鉄筆で、教室の黒板に刻みつけておきたいのだ。」と述べる筆者の数々の詩から、子どもに向かう学校教員の責任の大きさを感じさせてくれる一冊です。

推薦図書　教員に薦める５冊

立命館宇治中学・高等学校教諭
杉浦 真理

平和的手段による紛争の転換（超越法）

ヨハン・ガルトゥング 著
出版社：平和文化社／ 2000 年出版

著者提起の紛争の解決法（トランスセンド・メソッド）は、北朝鮮のミサイル対策にも有効です。武力紛争から家庭の紛争まで、非暴力に転換する方法を考えよう。

世界が 100 人の村だったら

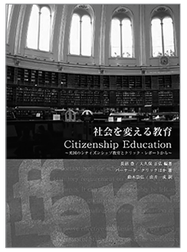
池田香代子 再話／ C. ダグラス・ラミス 対訳
出版社：マガジンハウス／ 2001 年出版

グローバル・シティズンシップの基礎になる世界認識を育む。立命館国際平和ミュージアムのサイコロ君（500 円）も購入されたし。小学生から読めます。
（続編も併読されたし）

シティズンシップの教育思想

小玉重夫 著
出版社：白澤社／ 2003 年出版

シティズンシップに関係する教育哲学との対話である。なぜシティズンシップ教育が求められるのかを理解できる平易でかつ、多岐にわたった入門書です。



社会を変える教育

沼豊／大久保正弘／クリックレポート 著
出版社：キーステージ２１／ 2012 年出版

シティズンシップ教育を考える人の原点。イングランド発のシティズンシップ教育がわかる。

民主主義を学習する

ガート・ビースタ 著
出版社：勁草書房／ 2014 年出版

社会性を押し付けるシティズンシップに対して、主体性を大事にした民主主義的シティズンシップ教育を考えることのできる良書。統合をめざすシティズンシップに警鐘。